

# 音楽表現の本質観取

## — 意味の観点から —

小 畑 真梨子

### Essential sketching of music ～From the viewpoint meaning～

Mariko OBATA

#### 要 旨

本稿では、身体活動を通じた検証で、心身ともに音楽の感じ方の質を向上させることは、楽しさとともに音楽表現を深める可能性があることを示された先行研究、小畑(2017)において重要な因子とされた「質の意味」を考察していくものである。事実学に拠らず「意味」という視座から洞察的に見ていくことにより、その「質の意味」の洞察プロセスの行為そのものが、音楽を学ぶものや、音楽を指導していくものにとっての「本質」であるという“共通の認識”として生成されることを論じていくものである。

#### はじめに

昨今、音楽に関係する研究数は年々増加し、音楽作品および作曲家の分析考察、またその作品を演奏する上での表現方法の考察、演奏技法の探求・分析、楽器の考察といった専門文化主義的な研究、さらには「音楽」それ自体が及ぼす事象(阿久津, 2005)のような社会学的な視座からみた研究、医学的知見からみた療法的な研究、さらに「教育における音楽」では専門的知識に基づく音楽教育論(方法論)、音楽教育の歴史分析、学習指導要領の分析、はたまた音楽教育の存在意義等の研究が数多存在している。しかし、それらはほとんどが「音楽」を物理的な事物とみなした上で展開されるものであり、「音楽」そのものの本質観取の上に立ち、その重要性を言及した上で実践、実証研究されていると言えるものは少ない。

そもそも、音楽を物理的な事物とみなすには無理がある。その理由として次のような様々な問いを立てることが出来てしまうことにある。

たとえば「音楽」とは、その作品そのもののことなのか、作品を演奏したその演奏そのものなのか、だとしたら一体、いつの誰の演奏のことなのか、今まで演奏された全ての演奏のことなのか、作曲した本人の演奏のことなのか、全く演奏されてなかったら作品は存在していないことになるのかといった問いや、音を出す行為による音響効果そのものが「音楽」だと仮定し

た場合、その演奏に大部分が関与、依存することになり、作品としての評価に影響するのではないか、という問いにも及ぶことになる。もし「音楽=作品」のこと、と仮定した場合、作曲家の自筆譜そのものが作品なのか、印刷されたものは作品と言えるのか、焼失したらその作品は無くなってしまふのか、という問いがたてられる。これだけ問いを立てることができることから考えても、「音楽」とは一体何のことなのか、事物とみなすには無理があるということがわかる。実際、様々な見地から論じられ、最終的に抽象的なものであるという結論に留まり、この「漠然とし一般化することが難しい音楽観取の存在」が混沌としてしまっているからこそ余計に、音楽を専門とする領域において専門文化主義に集約され、「音楽」の存在自体が、一般的に深遠なものと認識されてきたように思う。

これらの問いに対して、美術や建築であれば解は一つである。美術作品＝「作者の手によって作られた事物そのもの(絵画、像、書)」、建築作品＝「作者が作った構造物そのもの(教会、城、塔)」というシンプルな解となる。また、「音楽」という語を動詞化し、「音楽する」場合、次のような問いも立てることが出来る。

我々音楽家が常用している「音楽する」というのはどういった意味なのか。音楽を演奏することなのか、それは個人なのか集団なのか、もしそうだとしたらなぜ2通りが存在するのか、それとも音楽を聴きに行くことなのか、聴くレベルは真剣に聞くのか、BGMの

ように流して聴くことは音楽していると言えるのか等々、問い自体も、抽象的なものが生成されるのだからこそ、私たちは音楽＝事物とみなすことで、時に事実学主義的に専門的な知識を膨大に援用し、分析、実証することにより、ある程度のエヴィデンス(根拠)を導き出すことが、「音楽」を扱った様々な研究での解を出し、意義の主張をするにはある意味近道となる。しかし、事実学はメカニズムを解き明かすには有用だが、“本質は何か”という土台の上に検証されることは置き去りにされているため、共通理解可能な答えを見失うか、共通理解可能な答えが見つけれられたつもりになるという状況に陥りやすい。

音楽表現という行為においていえば、「どう表現するか＝どう演奏するか」、「コミュニケーションツールの触媒として音楽を扱うにはどのような表現が良いのか」等、それらの問いに関しても、音楽そのものは事物であり、“どのように解析したら良い結果を出せるか”に終止する。これだけ抽象的なものであると提示してきて分かるように、相対化し続けること自体が終わりなき相対活動を生むことになり、ますます混沌としていく。音楽を扱う本来の正当性の「確信」が音楽を扱う者たちの中に訪れることは、深い部分での共通理解を成立させることであり、またそれを求めていく必要がある。

さらには、人類にとって必要な公教育で教科として音楽が存在している意味は一体何なのか、なぜ音楽なのか、どのような意味において教育構想に資する教科として必要なのか、この背景においても正当性および「確信」の深い共通理解を求める必要があり、その本質を見出すことこそが、最も早急に探求されるべき課題だと思われる。そのことについて、文部科学省の『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)』<sup>1</sup>の中でも指摘されている。中でも、『各教科等を学ぶ本質的な意義の中核をなすのが、「見方・考え方」で、それこそが教育と社会をつなぐものであり、学習や人生においてそれらを自在に働かせられるようにすることが大切である』と明記され、各教科の具体的な改善点については、『感性を働かせることや、音や音楽と自分との関わりを築いていけるように』などといった見直す必要のある点や、改善点が要求されている。さらに、『現行学習指導要領は、各教科等において「教員が何を教えるか」という観点を中心に組み立てられてお

<sup>1</sup> 文部科学省 2017 幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)。

り、一つ一つの学びが何のためか、どのような力を育むものかが明確ではない、その背景として指導の目的を「何を知っているか」とどまらせてしまっているのでは』、とも指摘されており、これらの問題点を克服する上で、最も根幹の部分の指摘だと受け取ることが出来る。

そこで本稿では、まず、音楽の本質観取が必要な理路を述べ、洞察(思考)プロセスの行為から見えてくる現象が、音楽を学ぶものや、音楽を指導していくものにとって重要な土台であるということを明らかにし、その上で、その現象が、共通理解として生成されることの重要性を明らかにしていきたい。

小畑(2017)では、音楽には言語が近づくことが出来ない部分があり、音楽表現において感じる感覚を言語化できないものも、身体表現を使えば音楽に内在するものを見つけ出すことが可能であることが検証されている。また、自由な音楽表現のためには、個人が十分に音楽と向き合うことも重要であることを示している。しかし、そこでは、作品に対して内在するものを知覚する「質の意味」に対して言及されていない。

本論では、音楽そのもの自体が、哲学者である西研の言う、『「本質」は決して“どこかにあらかじめ存在しているアイデア”のようなものではない。それを問う側の関心や観点に従って現れてくる「関心相関的」なものなのである。』というものを命題として論じる。いわば物理や一般的な科学では、世界は物質だけで出来、必ず原因と結果の法則である因果律が成立するということや、自然界の物事には必ず先行する原因があり条件が全く同じであれば一つの結果に対して原因は一つしか存在しない、という物理法則のように答えをすぐに出せるものではないことという思考プロセスに着目した。

## 1. 現象意識について

まず現象的意識に着目してみる。現象的意識とは、心の中にある何かのイメージ(表象)や、美味しい、まぶしい、といった主観的な感覚のことで、存在しない架空の物事や、行ったことのない宇宙といったものに想いを巡らせる等、はるか遠くのを表象することができることは物理法則である因果律に従っているわけではないと考えるからである。もっと言えば、物は現象的意識を生まないのに、なぜ同じ物質である脳は現象的意識を生むのかといったように物理主義に大きな疑問を投げかけるものである。その主観的な意識を脳科学的に置き換えた言葉で“クオリア”というものがある。簡単に言えば、脳が主観的に感じるものであり、意識と類似し「私」が確かに体感する主観的な「感じ」のことである。脳科

学者の D.J.チャーメーズ<sup>2</sup> (1966～) によると、物理主義の視点から脳の状態を見れば仕組みや機能を説明することは可能であるが、主観的なクオリアの存在は無視されていると言っており、心の機能をいくら客観的に説明できたとしても、「私」の主観的な痛みや心地よさなどを客観的に説明するのは簡単ではないと言っている。理由は、突き詰めると世界は全て粒子の集まりだが、クオリアは粒子ではないので、物質世界のどこに位置づけられるのか、また物質である脳から、どのようなクオリアが生まれるのか、唯物論<sup>3</sup>だけでは解決が難しいことを指摘している。

脳内の神経細胞分子および原子の位置、また運動などを正確に調べることが出来たとしても、そこにクオリアは出てこず発見できないのである。そもそも、クオリアがどうやって生まれてどこにあるのかを求めること自体、物理学の基本的な考え方である質量保存の法則が成り立たないとも言える。ここで「意識」の定義づけをしなければならぬ。神経科学や物理学、生物学的な意味の「意識」と、主観の「意識」があり、前者は機能的意識、後者は現象的意識である。つまり後者の現象的意識において、「私」が感じるクオリアと他人が感じるクオリアは全く別物かもしれない、仮に同じであったところに、一方に別のクオリアが生じたとしてもそれを確かめる術はない。私が他人のクオリアを感じることも、第三者が私のクオリアを感じることも絶対にできないと言える。それは自分以外には全く別の世界が見えている可能性もあることになる。ゆえに「感じる」という意識には多様性に溢れていることがうかがえる。

もっと遡れば、プラトン (BC427～347) の解く“イデア”が存在するイデア界がそれらの多様性に満ちた意識の土壌となるものと捉えることも出来る。そこで、脳科学的見地から生み出されたクオリアという科学では証明の術がないものを、古典的思想から見ていくことにする。ルネサンス以降のヨーロッパで、地動説のような中世的世界像や知識が根底的動揺にさらされるようになり、その時の過去から受け継いだ知識や学問というものが権威を失い、人々は物事を理解する新たな思想というものを求めていったことで、伝統や先入観にとらわれない正確な認識に基づく確実な知識や、学問の在り方を追求したという背景がある。その背景の中、「意識」の存在を発見した人物、R.デカルトに焦点を当てたい。次節より意識についての思想が生まれたあたりからの論を展開していく。

<sup>2</sup> 哲学ゾンビと呼ばれる哲学者チャーメーズはこの分け方について「意識のハードプロブレム」と言っている。

<sup>3</sup> C.マルクス (1818～1883) らが唱えた。

## 2. 心身二元論

フランスの哲学者 R.デカルト (1596～1650)<sup>4</sup> は、「今後、仮に素晴らしい真理が発見されたとしても、それがすべてこの世は夢かもしれないと言われたならば、人間がどんな真理を発見しても意味がなくなる、だからこれだけは絶対に確かと言え原理を求めるとした。F.ベーコン (1561～1626)<sup>5</sup> が唱えた経験論を否定し、感覚や経験による知識は多くの誤りや不十分さを含むので信頼できない、として自らが思いつくあらゆるものを意図的に疑い、自分の存在 (身体) までも疑い尽くした (方法的懐疑)。その結果、たった一つだけ疑うことができないものが残り、その疑いの極点は「疑っていると考えている私」というものであり、これが「意識」であり、“もはや疑い得ないものである”という結論に至った。

要するに「夢かもしれないと疑っている自分」を方法懐疑的に疑っても、最後まで「夢かもしれないと疑っている自分」の「意識」は残ることになる。それは肉体的・感覚的自己ではなく、考えるという働きそのもの、そして疑っている自分は確実に存在しているということである。それを実体とみなすことで思考が精神 (実体) の本性であることを見つけた。また、精神と物体は依存し合うことなく独立分離的に別々に存在し、身体は物体と同じく機械的なものと捉えた<sup>6</sup>。以降、デカルトは世界を認識するものを「主体」とし、その認識した意識のことを「主観」と呼んだ。一方、認識されるものを「客体」とし、その認識された意識のことを「客観」と呼んだ。<sup>7</sup>この考えを、心身二元論 (物心二元論) という。

これらは、プラトンのイデア論と類似しているが、精神の自分が本性であるということ (=イデア) は同じであるが、身体 (=物体) は、精神 (=本性) の陰として感覚界に写っている、としたプラトン<sup>8</sup>に対して、デカルトは、別の独立存在の物であるという風に捉え、機械のように改造しうるものであるとした。つまり、デカルトにとって、心は何にも変え難い崇高で精神的なものであったのである。この心身二元論 (物心二元論) は、この後の西洋に大変影響を与え、自然は人間社会の生活を良くするために、神の支配を受けず人間

<sup>4</sup> R. デカルト “我思う故に我あり”

<sup>5</sup> この「経験論」の支持者は他に、T.ホブズ、G.バークリー、D.ヒューム、J.ロックらがいる。

<sup>6</sup> 一方で自然を純粋物質として機械的なものとみなす機械論的自然観の形成にも発展させた。

<sup>7</sup> デカルトが意識を発見する前までは、世界の中に自分が存在するという考えが常識であった。

<sup>8</sup> イデア論

の精神支配からも独立して改良していけるものとし、西洋の産業発達に寄与することとなった。<sup>9</sup>しかしこの二元論については、理論的に弱い部分があり、理論の限界を残していることを以降に出てくるドイツの哲学者I.カント（1724～1804）が指摘する。

### 3. 「意識」の成立

イギリスでは清教徒革命、名誉革命がおこり、フランスではフランス革命がおこっていたころ、ドイツではそういった命をかけて絶対王政に対抗するような革命は起こらず、市民社会を形作るという意味で遅れをとっていた。しかし、精神的な革命が勃発し、カントが説くドイツ観念論（＝理想主義）<sup>10</sup>が生まれる。それまで、理性を重視した啓蒙思想家たちは、学識を重んじる一方で、無知な民衆を軽蔑するような風潮であったが、人間性に根差している心情などを尊敬していくことが大切だと自省し、新たな基礎理論を説いた。そこに至るまでの経緯を述べる。

カントは、経験論と同じように“知識は経験によるもの”と考えたが、前項の経験論と異にするところは、“人間には共通の経験の仕方と理解の仕方があらかじめプログラミングされている（ア・プリオリな状態）”ということである。つまり経験に先立って成立しているということだ。

その経験の仕方や理解の仕方は人類共通であり、経験の仕方を「感性の形式」、その後の知覚である理解の仕方を「悟性のカテゴリー」とした。

前者の特徴は、リンゴはこの空間にはない（ある）、リンゴは今の時間にはない（ある）、リンゴはさっきの時間にはあった（無かった）などのように、人は物事を必ず空間的、時間的に捉える、物事自体は空間の中にあるが、時間と空間は現実にはなく、どこにあるのかというと、“人の頭の中にある”としている。後者は、“ボールが頭に当たったら、飛んできた方向を見る”などし、飛んできた原因を探ろうとするなど、量・質・関係・様相などに関わる12のカテゴリーがあるとしている。対象である物事を五感が知覚し、前述の「感性の形式」で時間的空間的に捉えたのち、「悟性のカテゴリー」が対象を認識するという一連のシステムのことを、「理性」と呼び、それは人間に先天的に備わっているとした。ここで、「悟性のカテゴリー」が分析したあとの対象の姿のことを、カントは「現象」と呼び、すなわち

物自体（例えばリンゴ）が人間によって認識されて初めてリンゴになった状態のことが「現象」である。従来（カント以前）は、対象＝現象であり、人間が認識した姿、現象と同じであったが、カントは対象≠現象で、人間が認識した姿と一致しないとした（＝加工）。リンゴがあるから、それをリンゴと認識する「認識が対象に従う」のではなく、人の感性や理解の仕組みが対象を（都合よく）秩序付けリンゴの認識を構成する「対象が認識に従う」としている<sup>11</sup>。認識対象は人間より先にあるのではなく、人間の構想力の産物として後に出現し、認識というものが人によって変わる可能性があり、信頼性がないことを示したのである。しかし理論は理想的であったが、フランス革命後の無秩序な社会においては、現実との格差が大きかった。そのことについて「現象」という概念を見出す偉業を成したカントを記憶しつつ、批判的に思考し、磨き進めた人物G.ヘーゲルを次項で述べる。

### 4. ヘーゲルによる「意識」

G.ヘーゲル（1770～1831）は、前項カントの意思の自立に反し、無秩序な状態に陥った社会の現実を目の当たりにし、「理性」への信頼が揺らいでいく中、“人間とは他者と交流しながら生きており、その自由は個人の主観的な心情を超えて、社会や歴史と無関係ではない”と言って批判した。<sup>12</sup>しかし、「理性」事実は信頼をしつつ現実問題に向き合い、人間の自由と個人の人格を超えた精神の歴史から捉えなおすことを試みた。

いわば“カントの言う認識能力は、機能が固定されているわけではなく、認識能力は社会の中で教養を身につけながら自分の中で弁証法的に行い、「客観」の全貌を完璧に捉えること”を目指したのである。そして、完全な認識能力を持った人間の精神のことを「絶対精神」と呼んだ。その精神は主観的精神→客観的精神→絶対精神というように展開されていくものである。

さらにその精神は自己否定<sup>13</sup>をして物質へと外に現れることで、“自らが絶対精神であることを明らかにする”のである。例えば、画家が作品で自己表現をし、対象（物質）として外に出すことで他人（人々）にも精神自体が目に見える形として承認される、つまり、主観的な人格があらかじめ存在しているというより、作品の完成に努める労働（自分自身を表現していく過程）によって形成され実現するということになる。絶

<sup>9</sup> 西洋の思想にも大きな影響を与えた。また、デカルトの合理論の継承として、B.スピノザや、G.W.ライプニッツらがいた。

<sup>10</sup> 経験論と合理論を批判的に哲学した。また、G.ヘーゲルも継承の一人である。

<sup>11</sup> カントはこれを天地の動きが逆転したコペルニクスの地動説になぞって「コペルニクスの転回」と呼ぶ。

<sup>12</sup> 平安時代の末法思想（現世に期待せず）に類似する厭世主義思想も出現。

<sup>13</sup> ヘーゲルは物質化することを「否定」と呼んだ。

対精神の本質は自由であり、歴史は自由の実現過程であるという結論を導き出したヘーゲルは“文化表現そのものが最高度の自由を感じるものであり、それは一過性のものではなく深い承認を獲得する”と言う。まさにヘーゲルは意識（精神）がどのように成長していくのかを学的な理路として纏めたのである。

## 5. まとめ

述べてきた二人の思考の展開だけでも、人間の意識は捉えどころが無く、故に長い間（今から2,300年前から）様々な思考が展開されてきていることが分かる。機能的意識は時代とともに進化し解明が進むが、一方の主観的意識の方は、前出の時代から変わっていないと捉えられる。しかし、退行的思考で「意識」を「精神」と定義づけることが可能ならば、我々音楽家は、ヘーゲルの言う“作品の完成に努める労働”（自分自信を表現していく過程）について、探求することが、自由への近道だと言わざるを得ない。音楽家の身体を物体とするならば、理性という装置が導き出す音が、絶対精神の表れと言うことが出来、完成に努める作品自体が、演奏のことならば、音は、消えていく性質のものである、表し続けること＝演奏をし続けること、と置きかえられるのではないだろうか。カントの「理性のシステム」においては、“音がここに（現在）ある”というように時間的に捉えたその音を分析するその瞬間（カテゴリーが分析している状態）こそ「本質観取」であり、そこを追求することで「精神」の表出に未知の可能性が秘めているということが出来る。逆に言えば、そこを追求しないと本当の意味での「自由」を獲得することは出来ないということになる。さらに自由度を高めていくのも私という主観に基づく意識である。

小畑（2017）では、人は音楽で言語化できない部分を感じることができるとし、ランガー（Susanne.K.Langer, 1895-1985）の言葉を引用しているが<sup>14</sup>、本質を理解することが出来る要因、それは感情を生み出す元に「意識」があると言えることが分かった。

音楽の「質の意味」の洞察プロセスの行為そのものが音楽を学ぶものや、音楽を指導していくものにとっての「本質」であるという“共通の認識”として生成されることまでは到達し得なかったものの今後、この

問題を中、長期的に検証をしていくことで、音楽の教科化に対する批判、また理念や信念の乱立を避けることや、実践、実証などに寄与する可能性があることを示すのが今後の課題である。

## 【参考文献】

- 阿久津洋巳・市原茂・石戸谷真由子 香りの感情価に及ぼす音楽の影響 日本官能評価学会誌 第9巻（2005）.  
 小畑真梨子 音楽表現の再考—身体活動を通して— 三重大学教育学部研究紀要 第68巻（2017）.  
 文部科学省 幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）、（2017）.  
 西 研 「考えあう技術—教育と社会を哲学する」 ちくま新書、（2014）.  
 廣松渉編「岩波哲学・思想事典」岩波新書、（1998）.  
 長谷川宏「新しいヘーゲル」講談社現代新書、（1997）.  
 竹田青嗣「現象学入門」NHK ブックス、（1989）.  
 S.K.ランガー「芸術とは何か」池上保太郎訳、岩波新書、（1983）.  
 S.K.ランガー『感情と形式』大久保直幹他訳、太陽社、（1987）.  
 ドナルド・H・ヴァン・エス「西洋音楽史 音楽様式の遺産」新時代社、（1986）.

<sup>14</sup> “音楽は人間感情（内的生命、主観的現実）の模造としてその質に形式を与え、（シンボル化、抽象化、客観化）、言語では不可能なやり方でそれを誰にでも知覚できるものにする。これによってわれわれは、自己の奥底に存在する感情を想像し、その本質を理解することができるのである。”

“音楽は言語が近づくことの出来ない感情の本質を詳細かつ真実味をもって明らかにすることができる。”